

キャリア形成を踏まえた経営学部教育の実態と方向

—「キャリア・グローバル指向の経営学部教育に
向けた実態調査」を中心に—

坂上 順子・上村 聖・小野 正人

要 旨

本稿では、城西大学経営学部生のキャリア形成に向けて、学生をどう社会につないでいくか、学生の視点を踏まえて、今後の学部教育・運営の検討を進め、提案をまとめた。城西大学経営学部の共同研究グループは2017年度に「キャリア・グローバル指向の経営学部教育に向けた実態調査」を実施、その調査結果を整理・分析して課題を抽出した。それによると、経営学部生の多くは入学当初よりキャリア意識が高く、将来のキャリアにつながる学習には関心を持っているが、一方で同世代に比して勉学で劣位にあるとする学生が多く存在している。またインターネットやアルバイトに費やす時間が長く、学習時間を十分に確保できていない学生や、進路・就職、学習上の問題や経済的事情を悩みとする学生も多数認められた。今後こうした経営学部生の学習意欲を喚起し、将来のキャリア形成につなげていくためには、どのような学部教育や運営を行うべきか、学生の視点を踏まえた改善案を検討した。

キーワード：キャリアデザイン、学生生活、学生意識、就職活動、学部運営、IR

1. はじめに

大学・学部にとって重要なミッションの一つは、学生のキャリア形成を踏まえた教育・運営を行い、学生を入学から大学、大学生活を経て社会へとつないでいくことである。

大学・学部や学生を取り巻く社会環境は多様に変化しており、特に学生にとっては、将来どのような環境の変化が起ころ、どのように対応しながらキャリアを積んでいくべきかをあらかじめ予測し行動していくことは、これまで以上に難しい時代に入っているといえる。

多様な社会環境の変化は、産業構造の変化はもとより、少子高齢化の進行によるところが大きい。中央教育審議会によると、大学進学者数は現在の80%（63万人、2017年）から2040年には51万人規模に大幅に減少するとの試算が示されているが^①、こうした少子高齢化の進行は大学・学部にとって将来の学生数の確保という重要な課題に直結し、学生にとっては将来のキャリア形成に重要な影響を及ぼす可能性がある。

現在、新卒の採用状況は売り手市場が続き、学生にとっては内定を獲得しやすい環境にあるが、大学生の就職市場は年々早期化する傾向にある。そのため、教育現場では授業を欠席してインターンシップや選考のための説明会や面接、あるいは内定後の研修に参加するなど、就職先の予定を優先し大学での学習の機会が損なわれるケースが多くみられる。今後、就職活動の時期が長期化される事態となれば、学生は就職活動により多くの時間を費やすこととなり、これまで以上に学習の機会を失う可能性がある。内定を獲得しやすい環境は、新卒の学生による就職先の安易な選択や、安易な転職による早期離職を招くリスクもある。最近の厚生労働省の資料^②によれば、新卒大学生の3年内離職率は31.8%に至っている。大卒の離職率は短大卒（41.5%）・高卒（39.3%）・中卒（64.1%）に比べれば低いとはいえ、キャリア形成に影響を及ぼす重要な現象である。早期離職は職業技能の十分な蓄積にならず、社会全体にとって損失につながる可能性がある。転職先が理想の職場である保障はない。早期離職者は社会的信用を得られにくく、家庭生活における経済的な安定の確保にもつながりにくいリスクがある。企業にとっても、人材が安定して確保できなければ運営に影響が及び、ひいては政府の財政運営にまで影響が及ぶだろう。

前述の中教審の答申では、大学が「学修者本位の教育への転換」を図り、学生が「予測不可能な時代を生きる人材」として育成されることを求めている。社会環境が大きく変化する中において、学生にとって進路選択や就職という実社会に出ていく段階における意思決定は今後益々難しい状況になっていくものと予想される。そのような難しい時代に、学生は自分のキャリアをデザインするスキルを身につけ将来のキャリアにしっかり向き合っていくこと、また大学生活の中で時代の変化を読み取り、環境の変化にも柔軟に対応していくことができる力を身につけること、そして学生がその学生らしく豊かな人生を送っていけるようになることが重要である。そのため、大学・学部はどのような教育・運営を行っていく必要があるかについて検討を重ねていくことが重要であり、進むべき方向を見定めるための現状把握が必要となる。これが本稿の研究目的である。

今後の大学・学部の教育・運営を検討するにあたり、まず学生がどのような意識や環境のもとで大学生活を送っているのか、また何を大学に求めているか、その実態を把握する。本稿においては、学部生のキャリア意識や学業・生活実態の把握を目的として、2017年度に城西大学経営学部共同研究グループで実施したキャリア・グローバル指向の経営学部教育に向けた実態調査」

(学長所管研究奨励研究)の調査結果を、学生のキャリア形成という視点から整理・分析する。そこで浮かび上がった課題を抽出し、学生の意識や生活実態を理解した上で、学生のキャリア形成³⁾に向けた、今後の経営学部の教育・運営について検討を進め、最後に改善策を提案する。

2. 経営学部のアンケート調査⁴⁾

(1) 調査の背景

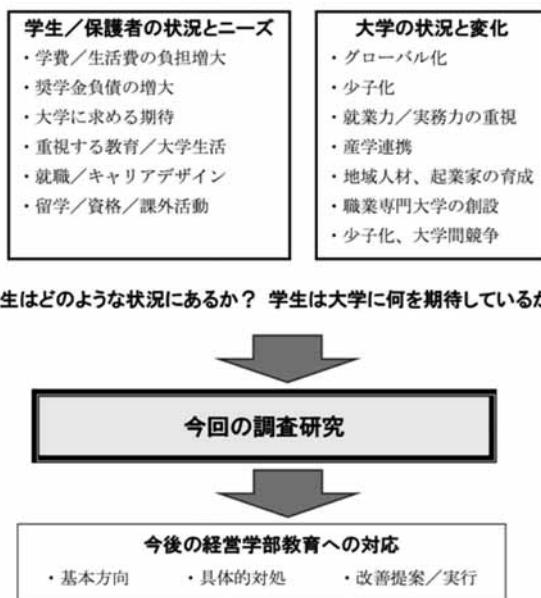
この共同研究グループの調査は「城西大学経営学部の学生について、経済状況・社会意識・求める教育内容・キャリア選択等の状況が実際にどのようなものかを、アンケート調査を中心に把握・分析し、今後の経営学部教育の発展につなげることを目的」としたものである。この調査では、以下の3つの背景を強く意識している。

第一に『学生の構造変化』である。言うまでもなく大学進学率が上昇し、高校卒業者の過半数が大学で学び、そのほとんどが民間企業等の労働市場で職を得る社会構造にある。大学が付与する教育のあるべき姿も、あるいは大学生と家庭が望む大学教育も、過去の昭和の時代とは変わったものになってきている。大学においては実社会の職業をより意識した教育の重要性が高まるとともに、近年のグローバル化に対応するための教育の変化が必要となっている。一方では、大学教育の大衆化の中で大学に十分キャッチアップできていない大学生に対し構造的継続的な対応が必要であり、大学は所属学生の状況を把握したうえで、実社会の求める人材を育成することが一層求められるようになってきている。つまり大学は『教育対象層という市場(高校)』と『教育対象を送り出す市場(就業)』の2つの市場を一段と意識する必要があるが、経営学部の学生は大学側が思う以上に変化しているのではないかという問題意識が今回の背景にある。その中で、学生の実態とニーズを予見なく分析して特徴を把握し、今後の望ましい経営学部教育の方向を検討することを主な狙いに定めた。

第二に『学生評価の重要性の高まり』である。大学数と収容人員が増加する大衆化が進行する中で、大学は主たる受益者(学生・保護者)から選ばれる立場に転換し、学生・保護者も学費負担が増大する中で入学決定の評価軸が厳しくなっている。入学前・在学中・卒業後における学生評価は、今後の大学運営にさらに影響度を強めるものと思われる。また、大学の教育情報公開の項目として『学生の満足度』が義務化される方向との報道がある⁵⁾。

第三に『IR(Institutional Research)を意識した教育運営』である。長期的視野に基づいて教育・学習のインプットとアウトカムを把握し、その結果を教育改善と教育改革につなげることが大学の課題になっている。IRは先進国の大学で一般化し国内各大学が導入を進めていると喧伝されているが、実際に本学の学部運営の現場でIRが十分に活用されているとはいえない。今

図1 「キャリア・グローバル指向の学部教育に向けた実態調査」の目的（概念図）



(出所) 城西大学経営学部 (2018), p. 2。

回のような学生が回答したデータを使って運営を検討することがIRによる教育改善の重要なステップとなる。

(2) 調査方法

調査方法は、2018年1月に研究メンバー6名の教員が、城西大学経営学部 に在籍する1～4年生（学部研究生を除く）の学生を対象にマークシート回答型アンケート調査で実施（授業後に匿名で任意回答し提出回収）した⁽⁶⁾。回答者数合計314名のうち、有効回答数は309名（在籍学生の15.3%）であった。質問票は、A属性、B大学生活、C経済状況、D入学理由、E授業、F自己意識、Gキャリア・就職、Hグローバル、I地元・ローカル、J授業評価、K大学の評価、に分類され、71項目（全91問）で構成されている。

3. 調査結果の整理

本調査の調査報告書では、多様な調査結果の中でも、特にキャリアと関連する内容について、「学生の就職への関心と不安や授業における就活支援への強い期待が明るみになった」としている。経営学部という学部の特性から、学生はキャリア意識が高いであろうことは想定内の結果といえるが、その一方で就職や進路に対する不安や授業への期待があるという結果は、今後の教育

や支援体制強化の検討につながるものである。

学部の教育・運営に際し、学生を社会へつないでいくことが学部の重要なミッションの一つであることを前提として、調査結果をキャリアに関連する項目を中心に整理する。整理にあたっては、テーマを(1)キャリア意識、(2)学習意識、(3)大学・学部への期待、の3つに分け、(1)はさらに学生評価につながるよう、1)入学前、2)在学中、3)卒業後の3段階に分けて整理する。(2)は、キャリア意識との相乗効果が期待される学習意識にかかる項目について整理する。(3)では学生が大学や学部にどのような期待を寄せているかを1)授業評価、2)大学評価の2つに分けて整理する。

(1) キャリア意識

1) 入学前

① 入学年と性別

【問1 入学年と性別をマークしてください。】

有効回答者男女合計 309 名のうち、全体で男性は 74.4%、女性は 25.5%であり、経営学部の男女比と大きな差異はなく、概ね経営学部生の母集団を表している⁷⁾。また、入学年別では、2017 年（1 年生）が 25.6%（男性 18.8%、女性 6.8%）、2016 年（2 年生）（男性 19.1%、女性 5.5%）が 24.6%、2015 年（3 年生）（男性 18.4%、女性 8.1%）が 26.5%、2014 年（男性 16.2%、女性 4.5%）が 20.7%、左記以外が（男性 1.9%、女性 0.6%）が 2.5%となっている。

② 出身地

【問2 あなたの出身地（入学までに住んだ都道府県）をマークしてください。】

調査に参加した学生は、埼玉県が 46.6%と全体の半数近くを占め、関東地方（東京都 12.0%、東京都・埼玉県以外の関東地方 12.9%）が全体の 7 割以上を占めている。

③ 出身高校

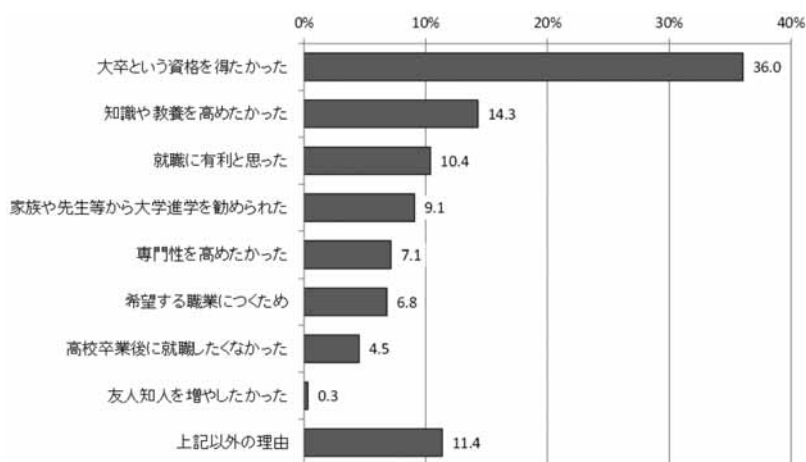
【問3 出身高校の属性をマークしてください。】

出身高校は、「公立普通科」が 43.0%で最も高く、「私立普通科」がこれに次いでおり（30.4%）、合計すると普通科が 73.4%を占めている。学部特性からみれば、商業科・工業科出身者が多くいてもおかしくない状況だが、公立・私立の商業科・工業科合計は、25.2%と四分の一にとどまっている。多くの普通科の学生がキャリアにつながる学部選択をした可能性がある。

④ 大学に入学した一番の理由

【問28 大学に入学した一番の理由について、一番近いものを選んでマークしてください。】

図2 大学に入学した一番の理由



(出所) 城西大学経営学部 (2018)。以下、図3以降の図表も同じ。

「大卒という資格を得たかった」(36.0%)が最も高い。「知識や教養を高めたかった」(14.3%)「就職に有利と思った」(10.4%)「専門性を高めたかった」(7.1%)「希望する就職につくため」(6.8%)「高校卒業後に就職したくなかった」(4.5%)が挙げられ、これらを合計すると79.1%となる。キャリア意識をもって入学してくる学生が多くいることがわかる。

⑤ 経営学部以外の進路選択

【問30 高校3年生当時の進路選択において、城西大学経営学部以外に最も可能性が高かった進路をマークしてください。】

城西大学経営学部以外の進路として「他の4年生大学」61.1%が最も多い。「経営学部の受験以外に考えなかった」は16.8%であった。城西大学の他学部を考えた学生は8.3%にとどまっている。

⑥ 経営学部の志望順位

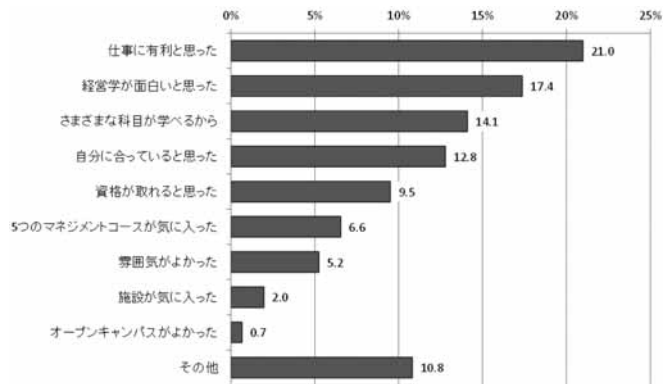
【問31 進路選択において、城西大学経営学部の志望順位をマークしてください。】

城西大学経営学部を「第一志望」とした学生が44.6%と最も高い。「第二志望」は20.5%、第三志望以下も約3割存在する。

⑦ 経営学部を選んだ理由

【問32 あなたが経営学部を選んだ理由をマークしてください。】

図3 経営学部を選んだ理由



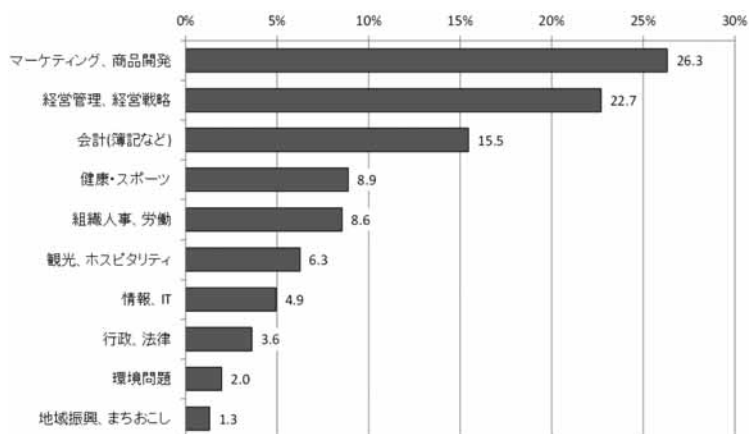
経営学部を選んだ理由は多様であるが、「仕事に有利と思った」が21.0%で最も高く、また、「経営学が面白いと思った」(17.4%)、「資格が取れると思った」(9.5%)の合計は47.9%と半数に近い。「さまざまな科目が学べるから」(14.1%)や「5つのマネジメントコースが気に入った」(6.6%)まで加えると68.6%となる。学部特性に沿って、仕事や資格取得、授業内容などに興味を持って入学している学生が多い。

2) 在 学 中

① 経営学部で興味を持っている分野

【問34 あなたが経営学部で興味を持っている分野は何ですか。】

図4 経営学部で興味を持っている分野



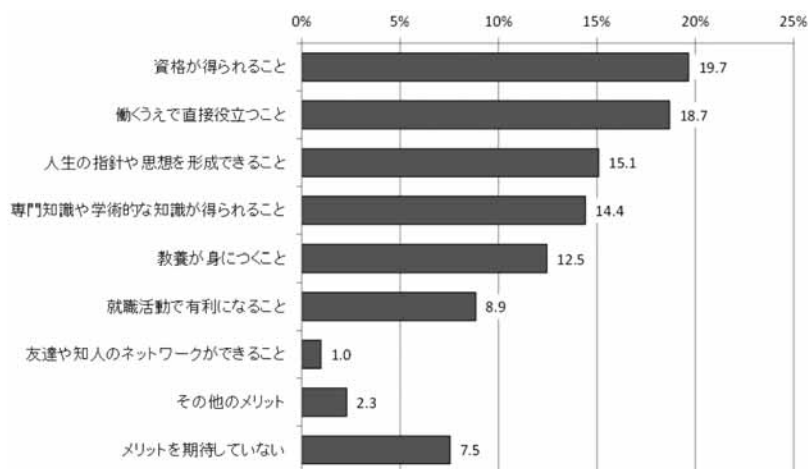
経営学部の学部特性はキャリアにつながる科目を中心に構成されているが、最も高かったのは「マーケティング、商品開発」(26.3%)である。「経営管理、経営戦略」(22.7%)、「会計(簿記

など」(15.5%)、「健康・スポーツ」(8.9%)、「組織人事, 労働」(8.6%)、「観光・ホスピタリティ」(6.3%)、「情報, IT」(4.9%)、「行政・法律」(3.6%)、「環境問題」(2.0%)、「地域振興, まちおこし」(1.3%)と続いている。

② 経営学部の授業で学ぶことで期待するメリット

【問 35 あなたは経営学部で学ぶことでどのようなメリットを期待しますか。】

図 5 経営学部の授業で学ぶことで期待するメリット



「資格が得られること」(19.7%)、「働くうえで直接役立つこと」(18.7%)、「人生の指針や思想を形成できること」(15.1%)、「専門知識や学術的な知識が得られること」(14.4%)、「教養が身につくこと」(12.5%)、「就職活動で有利になること」(8.9%)、「友達や知人のネットワークができること」(1.0%)など、回答は分散しているが、いずれもキャリア形成につながる意識の存在といえる。しかし「メリットを期待していない」学生も7.5%存在している。

③ 半年で深く悩んだことはあるか

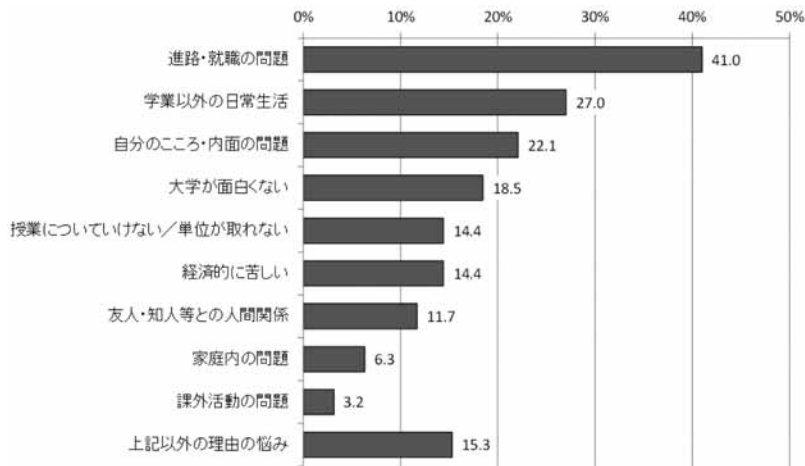
【問 20 あなたはこの半年で深く悩んだことがありますか。】

「悩みはない」(29.9%)が最も多いが、約6割の学生が1つ以上の悩みをもっている。そのうち、悩みの数が1つは27.6%、2つは17.6%、3つも17.3%と複数の悩みをもつ学生もいることがわかる。

④ 悩みの内容

【問 21, 問 22 悩みがあると回答した人に聞きます。あなたの悩みについて二つ選びなさい。】

図6 悩みの内容



「進路・就職の問題」が41.0%と最も高い。「学業以外の日常生活」(27.0%)、「自分のこころ・内面の問題」(22.1%)、「大学が面白くない」(18.5%)、「授業についていけない／単位が取れない」(14.4%)、「経済的に苦しい」(14.4%)、「友人・知人等との人間関係」(11.7%)、「家庭内の問題」(6.3%)、「課外活動の問題」(3.2%)、「上記以外の理由の悩み」(15.3%)と続いている。それぞれの事情の詳細は明確ではないが、特に進路・就職に関する悩みは半数近くいることは課題として挙げられる。

3) 卒業後

① 大学卒業後の就職についてのイメージ

【問40 あなたは大学を卒業後の就職について、どのようなイメージを持っていますか。】

「卒業後に働かなければならないと強く思っている」学生が60.8%と最も高い。「できれば働きたくないが、働かざるを得ない」(16.7%)、「働かなければならないと少し思っている」(15.0%)と合わせると92.5%となり、就職に対する意識の高さを読み取ることができる。なかでも、6割の回答者は強い意識をもっている。

② 大学卒業後の仕事と私生活の順位づけ

【問41 あなたは私生活と仕事をどう順序づけしますか。】

「仕事と私生活に優先順位はつけられない」とする学生は35.3%で最も高い。仕事を優先する「仕事を私生活よりも絶対に優先する」(14.9%)「仕事のほうが私生活より大事と少し思う」(29.7%)を選択した回答者は半数近く(44.6%)にのぼる。私生活を優先するとした回答者の合

計は20.1%にとどまった。私生活優先より、仕事優先する学生の方が多く、仕事への意識の高さが読み取れる。

③ 大学卒業後につきたい職業のイメージ

【問42 あなたはつきたい職業がイメージできますか。】

大学卒業後につきたい職業については、「少しイメージできる」(42.0%)が最も高い。「かなりイメージできる」(12.8%)と「明確・具体的にイメージできる」(7.5%)と強いイメージができて回答者は2割程度であるが、少しでもイメージできる学生を入れた合計は約6割である。イメージができていない回答者は33.1%であり、何らかの支援が必要といえる。

④ 最も希望する職業

【問43 現時点であなたが最も希望する職業を一つ選んでマークしてください。】

民間企業の「営業・販売」(33.9%)、「事務・管理」(20.8%)、「企画・開発」(15.6%)が上位3つを占め、民間企業の「福祉・介護・病院」(5.5%)を合わせると、75.8%が民間企業で占められている。公的部門の合計は4.5%であり「公務員・公的団体職員(事務)」(2.9%)と「公務員(警察・消防・自衛官)」(1.6%)で構成される。学校(教職員)は1.3%である。「なりたい職業が思いつかない」(12.1%)が1割おり、何らかのキャリア教育や支援が必要となる。

⑤ 転職意識

【問44 あなたの転職についての意識を一つ選んでマークしてください。】

「転職するかもしれないと思う」(30.4%)、「人生で1,2回は転職すると思う」(24.4%)、「人生で何回も転職すると思う」(8.6%)となっており、約6割が転職に対する意識を持っている。転職するとは「あまり思わない」(21.8%)と「全く思わない」(8.9%)という学生も約3割いる。

⑥～⑩ 将来についての意識

⑥ 【問45 将来独立して事業を起こしたいですか。】

⑦ 【問46 公務員や公共団体の職員になりたいと思いますか。】

⑧ 【問47 あなたはIT(情報通信)に関わる仕事につきたいですか。】

⑨ 【問49 経済事情が許せば、大学生時代に留学したい(留学したかった)と思いますか。】

⑩ 【問50 卒業後10年以内に海外で働きたいですか。】

将来独立して事業を起こしたいと「強く思う」(10.5%)と「少し思う」(25.7%)を合わせると36.2%であり、三分の一は独立への意欲がある。「公務員や公共団体職員」への希望者は、「強

く思う」(8.2%)と「少し強く思う」(33.8%)を合わせると42%と半数に近い数値となっている。ITに関わる仕事について「強く思う」(3.7%)と「少し強く思う」(26.5%)を合わせると30.2%である。留学に対する意識について、経済事情が許せば留学したい(したかった)は、47.8%と約半数が回答している。大学卒業後10年以内に海外で働くことについては、「強く思う」「少し強く思う」合計は31.8%である。

⑪ 自分が住んでいる地元の市町村が好きか

【問53 あなたは自分が住んでいる市町村が好きですか。一つ選んでマークしてください。】

地元の市町村が好きであると応えた回答者は、強弱含めて73.6%にのぼる。地元が嫌いとの回答はわずかながらいるものの「少し嫌い」「かなり嫌い」「とても嫌い」は、合わせても10%に充たない状況であり、地元への愛着を持つ学生が多数いることが確認される。

⑫ 都会と地方のどちらが好きか

【問54 あなたは都会と地方でどちらに好感しますか。一つ選んでマークしてください。】

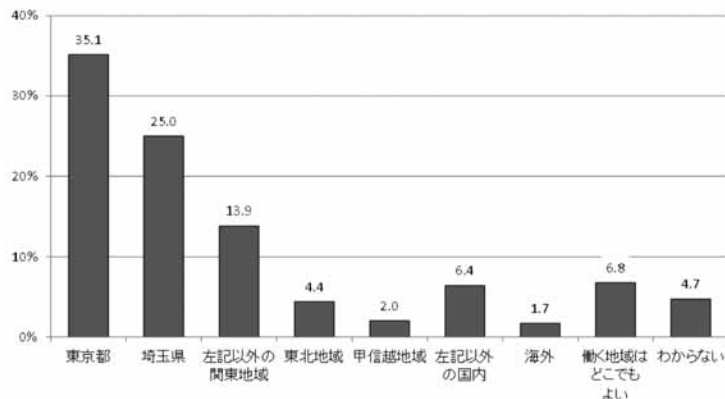
「都会の方が地方より好きだと少し思う」は28.3%と最も高く、「都会が好きだと強く思う」(19.0%)と合わせると全体の47.3%となり、必ずしも地元が優位ではないことがわかる。

⑬ 卒業後20代で働く場所について

【問55 あなたが大学卒業後20代で働く場所について、最も希望する地域を一つ選んでマークしてください。】

20代で働きたい場所は「東京都」(35.1%)が最も高く、ついで埼玉県(25.0%)、「左記以外の関東地域」(13.9%)と続き、合計すると73.9%に達する。前述の出身地でみた関東地方出身

図7 20代で働く場所



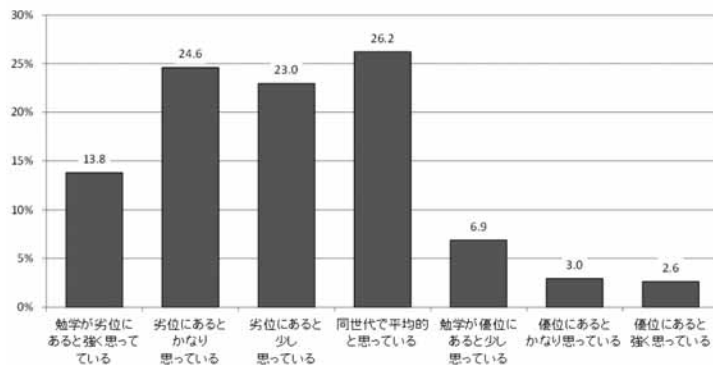
者の割合（合計71.5%）と拮抗する。「わからない」や「働く地域はどこでも良い」は合計で1割程度、「海外」は1.7%である。その他国内の地域は12.8%いることから、地域別の支援も重要である。

(2) 学習意識

① 勉学についての意識

【問37 あなたは同世代の中で勉学についてどういう意識を持っていますか。】

図8 勉学についての意識

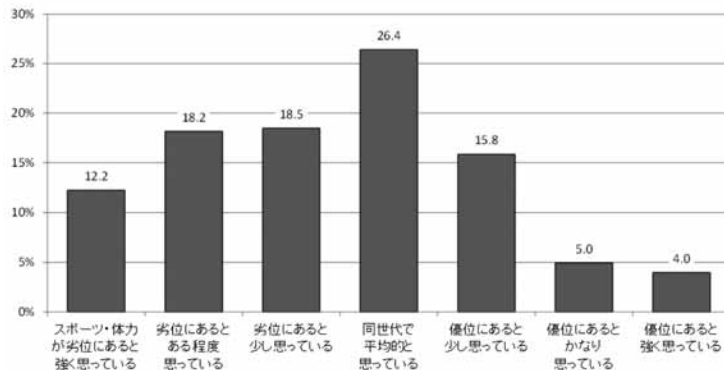


「同世代で平均的」とした回答者が最も多く26.2%であったが、意識の強弱含めて「劣位にある」と回答した学生が61.4%と高く、「優位にある」と思っている学生の12.5%と大きく差があることがわかる。

② スポーツ・体力についての意識

【問38 あなたは同世代の中でスポーツ・体力についてどのような意識を持っていますか。】

図9 スポーツ・体力についての意識



「同世代で平均的」が最も多く 26.4%で、その割合は勉学についての意識と同じ程度である。「優位にある」の合計は 24.8%であるが、意識の強弱含めて「劣位にある」と思っている学生の合計は 48.9%と半数近くいる。

③ 住居からの通学時間

【問 8 現在の住居から大学までの通学時間（片道、交通機関・徒歩を含む合計時間）をマークしてください。】

通学時間は「30分～60分」が 32.0%と最も多く、「60分～90分」（22.2%）、「90分～120分」（18.6%）、120分を超える学生も 12.4%と全体の 1 割以上となっている。通学時間に 60分以上かかる、通学時間の長い学生が過半数いる。

④ パソコンを持っているか

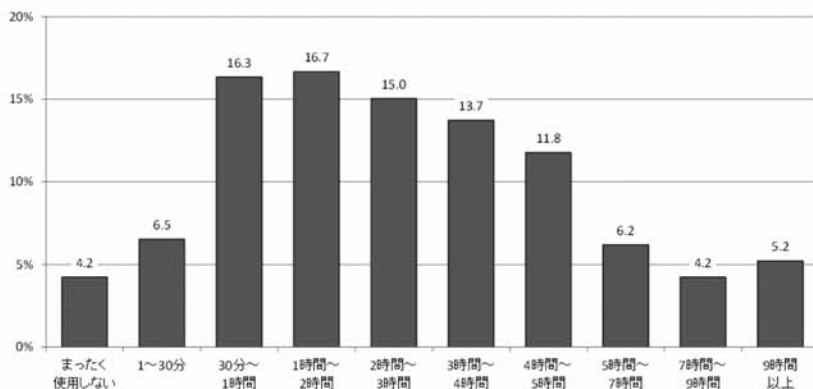
【問 9 あなたはパソコンを持っていますか。】

「自分の PC を持っている」が 59.3%と約 6 割で、自分の PC を持っていない学生が約 4 割存在する。「家族の PC を使っている」は 28.5%、「知人の PC を使っている」は 3.6%で、「使っていない」は 8.5%と 1 割未満であるが存在する。

⑤ インターネットの使用時間（一日平均）

【問 10 インターネットの使用時間（パソコン・携帯による、メール・SNS を含む）は、一日平均でどのくらいですか。】

図 10 インターネットの使用時間（一日平均）



インターネットの使用時間は、学生によってばらつきがある。「1時間～2時間」（16.7%）と「30分～1時間」（16.3%）がほぼ同じ割合で高く、「2時間～3時間」（15.0%）、「3時間～4時間」

(13.7%)と続く。全く使用しない学生が4.2%いる一方で、7時間以上が4.2%、9時間以上が5.2%いる。その使用目的は明確ではないが、質問の意味を取り違えていないとすれば、相当な時間をインターネットに費やしている学生がいることとなる。

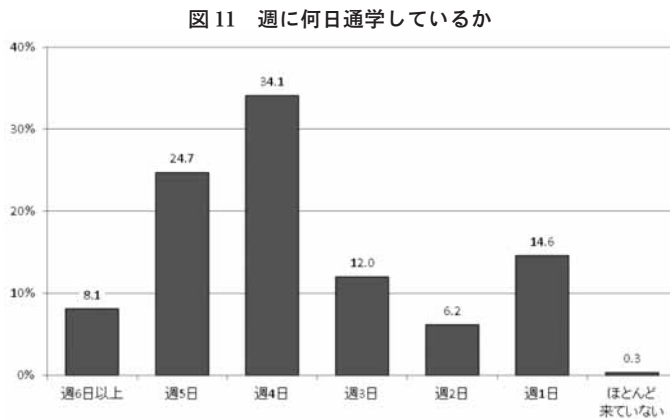
⑥ 携帯電話を持っているか

【問11 あなたは携帯電話を持っていますか。】

全体の98.1%がスマートフォンを持っている。「ガラケーを持っている」(0.3%)や「携帯電話を持っていない」(1.6%)もわずかながら存在することから、授業における使用等には注意が必要といえる。

⑦ 週に何日通学しているか

【問12 開講期間において、週あたり何日大学に通学していますか。】



「週4日」が34.1%で最も高く、次いで「週5日」が24.7%が続いている。通学日数を試算すると、回答者全体の平均は3.73日である。クロス集計結果では、学年による差が大きい。1年生は「週5日」、2年生、3年生では「週4日」、4年生では「週1日」が最も高くなっている。平均通学日数は男性が3.78日、女性が3.57日、1年生が4.86日、2年生4.28日、3年生3.78日であるが、4年生の平均通学日数が1.63日と少ない。

⑧ 週に何コマ講義を取っているか

【問13 現在、授業のある期間では週あたり何コマの講義を取っていますか。】

表1 週に何コマ講義を取っているか

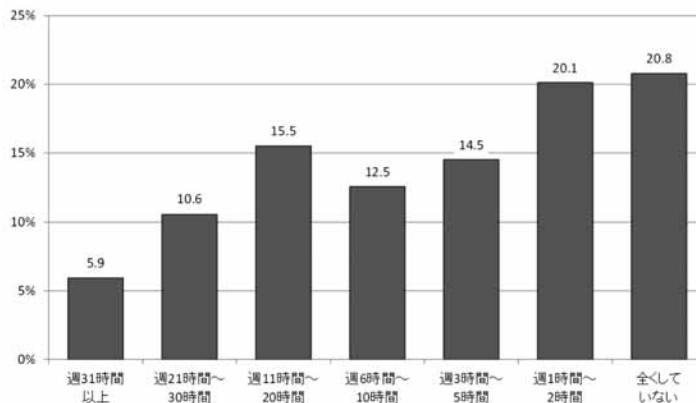
		合 計	Q13. 週に何コマ講義を取っているか						
			12 コマ 以上	10~11 コマ	8~9 コマ	6~7 コマ	4~5 コマ	2~3 コマ	1 コマ 以下
全 体		308 100.0	77 25.0	93 30.2	47 15.3	15 4.9	11 3.6	36 11.7	29 9.4
入 学 年	2017 年入学	78 100.0	43 55.1	24 30.8	6 7.7	4 5.1	0 0.0	1 1.3	0 0.0
	2016 年入学	76 100.0	24 31.6	36 47.4	9 11.8	1 1.3	1 1.3	3 3.9	2 2.6
	2015 年入学	82 100.0	8 9.8	29 35.4	29 35.4	7 8.5	5 6.1	2 2.4	2 2.4
	2014 年入学	64 100.0	2 3.1	4 6.3	1 1.6	3 4.7	3 4.7	30 46.9	21 32.8

週当たり受講している講義は「10~11 コマ」が30.2%で最も高く、次いで「12 コマ以上」が25.0%、「8~9 コマ」が15.3%である。クロス集計の結果では、学年間で差が大きく、4年生は週3コマ以下が79.9%を占める。1年生では、「12 コマ以上」、2年生では「10~11 コマ」、3年生では「10~11 コマ」と「8~9 コマ」で、4年生は「2~3 コマ」が最も高い。つまり、経営学部の学生は入学後3年生までのうちに多くの単位を取り、その後は8割以上の4年生が週3コマ以下の履修となっている状況が明確に表れている。

⑨ 週に何時間学習しているか

【問 14 現在、授業のある期間では、週あたり何時間程度学習をしていますか。(学習は授業の準備・復習、卒業論文、資格取得など授業以外も含んで考えてください)】

図 12 週に何時間学習しているか



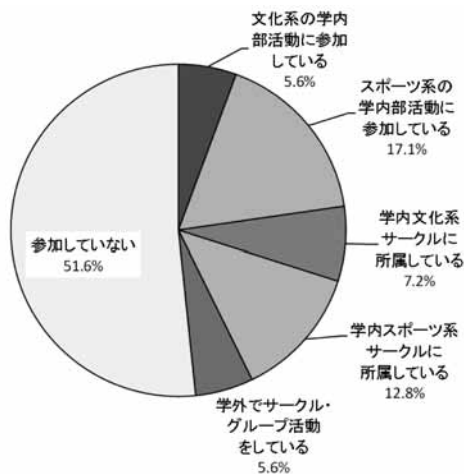
全体で「全くしていない」が20.8%と2割もいる。「週1時間～2時間」(20.1%)と合わせると、学習時間が週2時間以下の合計は40.9%に達する。

クロス集計の結果をみると、入学年(学年)ごとに1年生では、「全くしていない」が12.8%、「週1～2時間」が16.7%、で週2時間以下の割合を合計すると29.5%と約3割になる。最も多いのは「週3～5時間」の23.1%であり、ここまで合計すると52.6%の過半数となる。2年生では「週21～30時間」、3年生では「週11～20時間」が最も高く、1年生よりも長い時間勉強している割合が高いが、2年生、3年生においても、全くしていないを含む週2時間以下はそれぞれ36.8%と39.1%である。上の学年になるにつれ、「週2時間以下」が増加する結果となっている。4年生は、「全くしていない」が最も高く32.8%、「週1～2時間」(22.4%)と合計すると、62.5%と6割に達する。

⑩ 現在の部・サークル活動

【問16 現在の部・サークル活動についてマークしてください。】

図13 現在の部・サークル活動

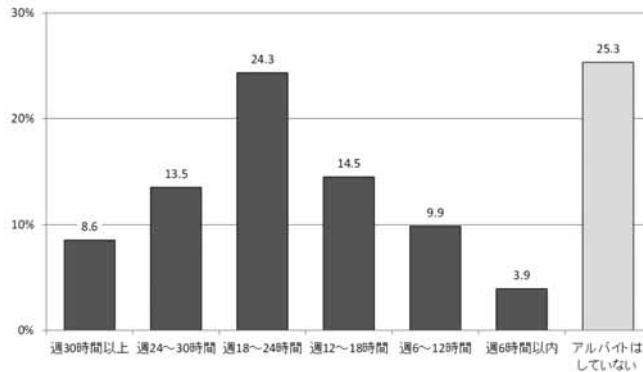


部・サークルに「参加していない」回答者が51.6%と高い。参加している中では「スポーツ系の学内部活動に参加している」が17.1%、「学内スポーツ系サークルに参加している」が12.8%となっており、スポーツ系の参加者は合計で29.9%である。「文科系の学内部活動に参加している」(5.6%)と「学内文科系サークルに所属している」(7.2%)で、合計すると12.8%である。

⑪ 現在のアルバイト状況

【問17 現在のアルバイトの状況をマークしてください。】

図 14 現在のアルバイト状況



アルバイトをしている回答者は全体で 74.7%である。アルバイト時間が週 18 時間以上は合計で 46.4%と半数近くいる。クロス集計結果をみると、学年による差が顕著である。1 年生と 3 年生は、「アルバイトをしていない」の回答者が最も多く、それぞれ 27.8%と 26.6%となっている。2 年生と 4 年生は「週 18~24 時間」が最も多く、それぞれ 32.4%と 31.3%である。週 18 時間以上を学年別にみると、1 年生 29.1%、2 年生 54.1%、3 年生 38.0%、4 年生 72.0%である。週 30 時間以上のアルバイトをしている 4 年生は、2 割に達している。

⑫ 主なアルバイト先の業種

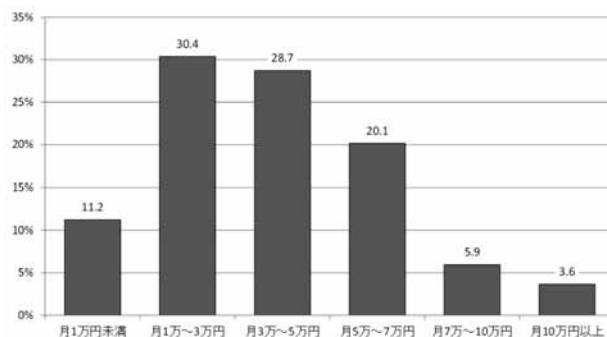
【問 18 現在のアルバイト先の業種を一つ選んでマークしてください。】

アルバイト先は「飲食店」(32.9%)が最も高く、次の「小売・卸売」(23.5%)の 2 業種だけで、過半数を超えている。

⑬ 自分の生活費

【問 23 現在の自分の生活費（学費・家賃・交通費を除く）をマークしてください。】

図 15 自分の生活費（学費・家賃・交通費を除く）



「月1万円未満」(11.2%)が約1割存在する。最も多いのは「月1万～3万円」(30.4%)と「月3万～5万円」(28.7%)である。約7割が月1万～5万の範囲に入るが、月3万円までの生活費でやりくりしている学生は41.6%いることになる。月3万円の場合、一日平均で千円の計算となり、余裕のある生活をしているとは言えない状況にある。「月5万～7万円」は20.1%である。「月7万～10万円」(5.9%)と「月10万円以上」(3.6%)を合計すると9.5%となり、約1割を占める。

⑭ 親（保護者）からもらっている生活費

【問24 現在、親（保護者）からもらっている自分の生活費（学費・家賃・交通費を除く）をマークしてください。】

「月1万円未満」(49.8%)が最も多い。「月1万～3万円」(23.9%)、「月3万～5万円」(11.0%)、「月5～7万円」(9.3%)、「月7万円以上」(6.0%)である。多くの生活費をもつ学生がいる一方で、約半数を占めるのが「月1万円未満」であり、何らかの手段により学生自身で収入を確保している可能性がある。

⑮ 支払っている家賃

【問25 支払っている家賃（食費・光熱費を除く）をマークしてください。】

「自宅居住（家賃負担なし）」(57.7%)が約6割を占めているが、家賃負担のある住居に居住している「自宅外居住（家賃負担あり）」は42.3%と半数近くいることがわかる。家賃が「1万円未満」は13.5%、「月1～3万円」は29.4%、「月3～5万円」が最も多い34.1%である。家賃負担者は明確ではない。

⑯ 家庭の経済状況をどう思っているか

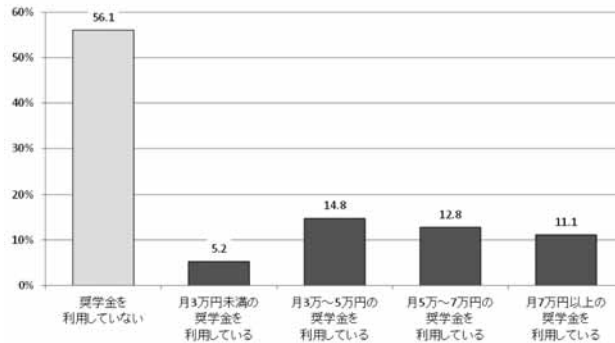
【問26 あなたは自分の家庭（保護者）の経済状況をどう思っていますか。】

最も多いのが「苦しいとも余裕があるともいえない」(31.9%)である。「やや苦しい」(12.1%)「苦しい」(16.6%)、「とても苦しい」(4.2%)の合計は32.9%となる。「少し余裕のある経済状態」(18.6%)、「余裕のある経済状態」(9.4%)、「かなり余裕のある経済状態」(1.6%)を合計すると29.6%となり、苦しい方がやや高い比率となっている。

⑰ 奨学金の状況

【問27 奨学金の状況をマークしてください。】

図 16 奨学金の状況



「奨学金を利用していない」が過半数の56.1%を占めている。これは、問25の「自宅居住（家賃負担なし）」（57.7%）に近い割合となっている。奨学金利用者は全体の43.9%である。「月3万～5万円」（14.8%）、「月5万～7万円」（12.8%）、「月7万円以上」利用している学生も11.1%と1割存在する。約4割の学生が奨学金を利用している。返済義務のある奨学金の場合は将来負担となり、学生の将来のキャリア形成に少なからず影響がおよぶ可能性のある状況となっている。

(3) 大学・学部への期待

1) 授業評価

① 経営学部の地域に関する科目について

【問56 あなたは、経営学部における地域に関する科目（まちづくり、地域の行政、地域と産業、地域企業研究など）に対してどのように考えますか。】

「経営学部の科目で最も関心がある」科目であるとした学生は11.3%、「かなり関心がある科目である」（14.4%）、「少し関心がある」（38.4%）まで合計すると64.1%となり、約6割の学生が、地域に関する科目への関心を示している。「あまり関心がない」（22.3%）と「関心がない」（8.2%）とする学生も30.5%と3割を超えている。

② 他の授業評価

【問64 あなたは、TOEICイングリッシュの授業をどう評価しますか。】

【問65 あなたは、会計入門の授業をどう評価しますか。】

【問66 あなたは、情報技術の授業をどう評価しますか。】

【問67 あなたは、基礎ゼミの授業をどう評価しますか。】

【問68 あなたは、ゼミナールの授業をどう評価しますか。】

【問69 あなたは、キャリアデザインの授業をどう評価しますか。】

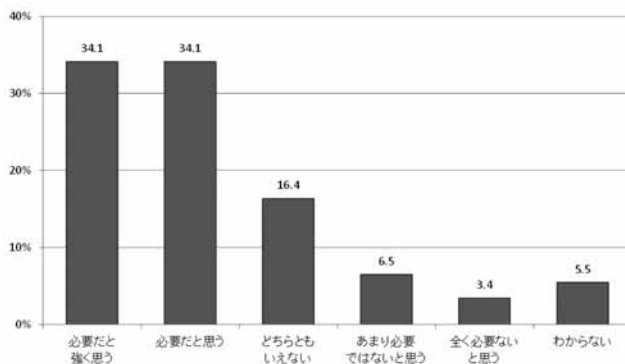
【問70 あなたは、経営学部プロジェクト研究科目をどう評価しますか。】

各授業について、「大いに満足している」「おおむね満足している」を合計してみると、「基礎ゼミ」(60.7%)、「ゼミナール」(57.7%)、「情報技術」(54.5%)、「会計入門」(52.7%)は、過半数が満足する評価となっている。過半数に達しない科目では、「TOEIC イングリッシュ」(33.9%)、「プロジェクト研究科目」(37.9%)があり、「キャリアデザイン」は36.8%にとどまっている。

③ 就職活動を支援する授業について

【問72 あなたは、就職試験準備の授業（筆記試験対策、面接対策など）をどう思いますか。】

図17 就職活動を支援する授業について



「必要だと強く思う」(34.1%)と「必要だと思う」(34.1%)を合計すると、68.2%と7割近くが必要としている。クロス集計では、特に就職活動を迎えている4年生で男女とも「必要だと強く思う」割合が高かった。また他の学年でも「必要だと思う」と「必要だと強く思う」を合計すると、1年生が62.7%、2年生66.2%、3年生が最も高く76.3%、4年生66.1%であり、1年生を含む全学年で就職活動に係る授業の必要性について意識が6割から7割いることが明らかになった。しかし、16.3%はどちらともいえないとし、また、必要ないという回答者も約1割存在する。

④ 期待することを教えているか

【問73 経営学部はあなたが期待することを教えているでしょうか。】

「どちらともいえない」が40.8%で最も高い。「期待することを十分に教えている」(11.6%)と「期待することをおおむね教えている」(22.9%)を合わせてと34.5%となり、その結果は約3割にとどまっている。また「期待することを十分に教えていない」(18.5%)と「期待することを全く教えていない」(3.4%)の合計は21.9%と2割に達している。今後の、授業改善の検討も必要となる結果となっている。

2) 大学評価

① 経営学部へ入学して良かったか

【問 36 経営学部へ入学して良かったと思いますか。】

「良かったと強く思う」(6.6%),「良かったと思う」(32.2%),「どちらかという良かったと思う」(31.3%)を合計すると70.1%にのぼり、度合いの強弱はあるものの、経営学部へ入学して良かったと思う回答者が7割いることがわかる。「どちらかという良くなかったと思う」(4.9%),「良くなかったと思う」(1.6%),良くなかったと強く思う(3.3%)を合計すると9.8%となり、約1割は良くなかったとしており、今後の課題となる。

② 他の大学等で学びたいと思うか

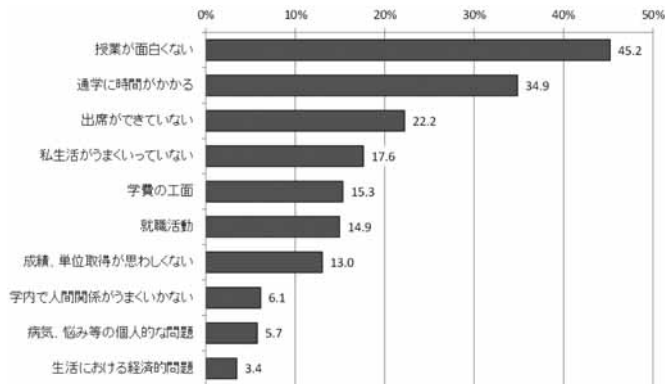
【問 60 城西大学経営学部ではなく、他の大学・学部や専門学校で学びたいと思いますか。】

「たまに思うことがある」(34.4%)で最も多く、「時々思うことがある」(20.1%),「頻繁に思っている」(11.8%)と合計すると66.3%と、全体の2/3にのぼる。

③ 城西大学で学ぶ上で支障があると思うこと

【問 74, 問 75 あなたが城西大学で学ぶうえで支障あると思うことを、選択肢から二つ選んでマークしてください。】

図 18 城西大学で学ぶ上で支障があると思うこと



「授業が面白くない」(45.2%)が最も高い。「通学に時間がかかる」(34.9%),「出席ができていない」(22.2%),「私生活がうまくいっていない」(17.6%)と続く。「学費の工面」(15.3%)と「生活における経済的問題」(3.4%)を合計すると18.7%が経済的事情である。「就職活動」については、14.9%の学生が支障があると回答している。「成績、単位取得が思わしくない」も13.0%と1割を超えている。人間関係や病気、悩み等個人的な問題を合わせると1割を超えるこ

ととなり、課題として挙げられよう。

④ 教育に満足しているか

【問76 あなたは城西大学の教育（クラブ・サークル・行事等の課外活動を除く）に満足していますか。】

「どちらともいえない」が28.7%で最も高い。「大いに満足している」(12.2%)、「おおむね満足している」(21.3%)の合計は33.5%であり、約3割は満足をしている。一方で、「少し不満がある」(11.2%)、「かなり不満がある」(4.9%)、「全く不満である」(3.8%)の合計は29.7%で不満を感じている回答者も約3割いることがわかる。

⑤ 課外活動に満足しているか

【問77 あなたは城西大学の課外活動（クラブ・サークル・行事等）に満足していますか。】

「どちらともいえない」(26.5%)や「わからない」(23.0%)が多いが、部・サークルに所属していない回答者が過半数(54.5%)いる影響の可能性がある。課外活動に、「大いに満足している」(16.6%)、「おおむね満足している」(18.7%)の合計は35.3%であるが、「少し不満がある」(8.8%)、「かなり不満がある」(3.2%)の合計も15.2%と1割以上いる。

⑥ 経営学部に対する評価が入学前と現在と比べて変わったか

【問78 あなたは入学前と現在と比べて『経営学部に対する評価』が変わりましたか。】

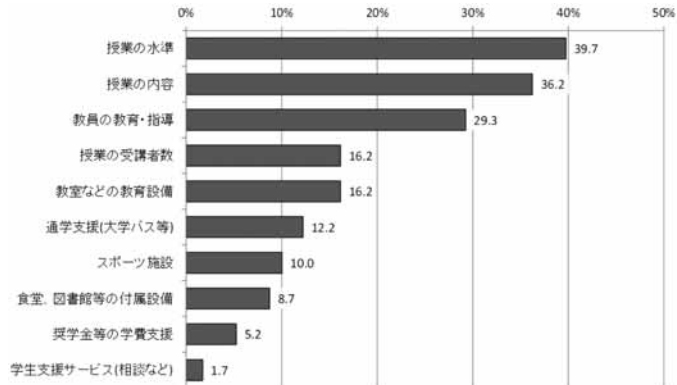
「経営学部に対する評価が少し上がった」(32.1%)が最も高く、「評価が大きく上がった」(8.7%)、「評価がかなり上がった」(10.1%)を合わせると50.9%の回答者から評価が上がったとしている。「評価が変わらない」は25.1%である。「評価が少し下がった」(11.1%)、「評価がかなり下がった」(2.1%)、「大きく評価が下がった」(4.2%)の合計17.4%の回答者からは評価が下がったとされている。

⑦ 経営学部への不満

【問79, 80 あなたが経営学部に不満があれば、選択肢から二つ選んでマークしてください。】

「授業の水準」への不満が最も高く39.7%である。「授業の内容」(36.2%)、「教員の教育・指導」(29.3%)も約3割が不満とし、他にも「授業の受講者数」(16.2%)、「教室などの教育設備」(16.2%)、「通学支援（大学バス等）」(12.2%)、「スポーツ施設」(10.0%)、「食堂、図書館棟の附属設備」(8.7%)、「奨学金等の学費支援」は5.2%が不満としている。「学生支援サービス（相談など）」は1.7%であった。

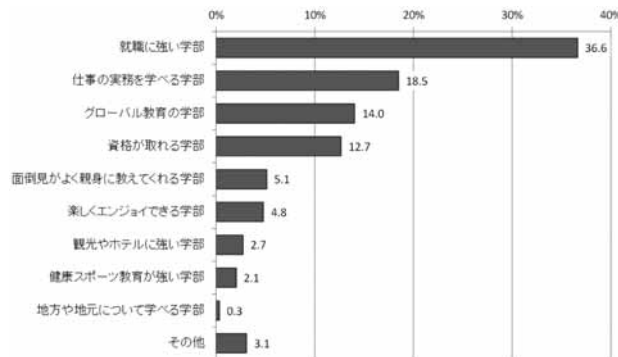
図 19 経営学部への不満



⑧ 経営学部に対する期待

【問 81 あなたは経営学部に対してどのようなアクションを期待しますか。】

図 20 経営学部に対する期待



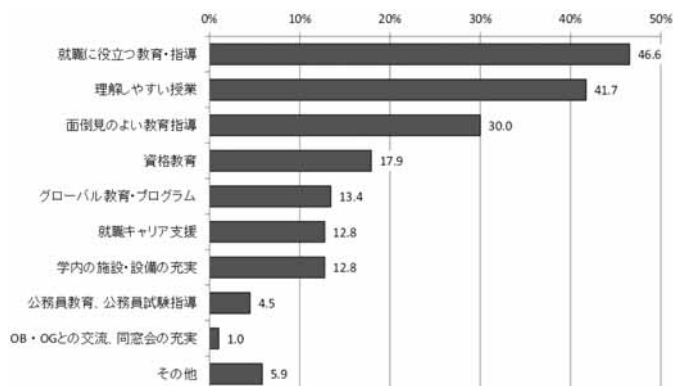
「就職に強い学部」が36.6%で最も高い。「仕事の実務を学べる学部」(18.5%)と合計すると、6割近い結果となる。さらに、「資格が取れる学部」(12.7%)および「観光やホテルに強い」を含めると約7割となる。就職と関係あるアクションを期待されており、将来のキャリアに対する意識の高さをうかがうことができる。クロス集計の結果でも、入学年(学年)、性別、出身校にかかわらず、最も高い期待は「就職に強い学部」である。

⑨ 経営学部で力を入れて欲しい活動

【問 88, 問 89 経営学部で力を入れてほしい活動を、二つ選びマークしてください。】

「就職に役立つ教育・指導」が46.6%と最も高く、「理解しやすい授業」(41.7%)や「面倒見のよい教育指導」(30.0%)と続く。「就職に役立つ教育・指導」は、「就職キャリア支援」(12.8%)と合わせると69.6%、約7割が就職に関する活動に期待を寄せている。「資格教育」

図21 経営学部で力を入れて欲しい活動

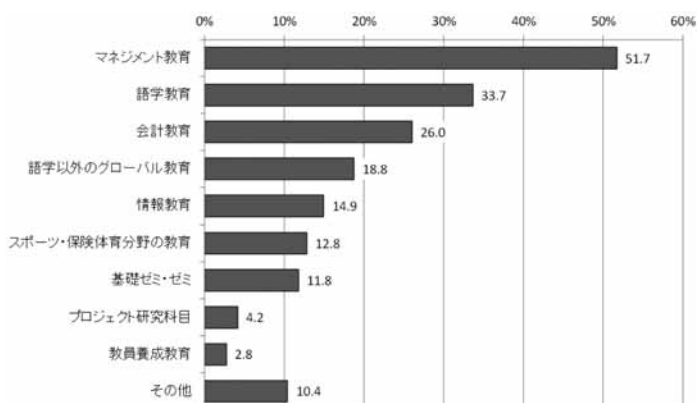


(17.9%)を加えれば、87.5%となる。クロス集計では、「就職に役立つ教育・指導」を求めているのは、「2017年入学(1年生)」、「2016年入学(2年生)」、「2015年入学(3年生)」である。「就職キャリア支援」では、「2017年入学(1年生)」(13.5%)、「2016年入学(2年生)」(5.5%)、「2015年入学(3年生)」(20.3%)と、就職活動を控えた3年生が20%台と他の学年に比べて高いが、2年生は5.5%と低く、今後の課題として抽出される。また、特に「2015年入学(3年生)・女性(45.8%)」と、3年生の女子学生は、「就職キャリア支援」を求めている。

⑩ 経営学部で充実させてほしい教育内容

【問90、問91 経営学部で充実させてほしい教育内容を、二つ選んでマークしてください。】

図22 経営学部で充実させてほしい教育内容



「マネジメント教育」と挙げる学生が最も高く、51.7%であり過半数を占めている。語学(33.7%)、会計(26.0%)、語学以外のグローバル教育(18.8%)、情報教育(14.9%)、スポーツ・保

健体育分野の教育（12.8%）、基礎ゼミ・ゼミ（11.8%）、プロジェクト研究科目（4.2%）、教員養成教育（2.8%）、その他（10.4%）と続く。クロス集計においても、入学年、性別問わず、「マネジメント教育」を望む声が高く、「2017年入学（1年生）女性」「2016年（2年生）女性」「2014年（4年生）女性」は、会計や語学教育を望む声も高かった。

① 大学にどれだけ期待しているか

【問 82 あなたは、【理解しやすい授業】について大学にどれだけ期待しますか。】

【問 83 あなたは、【就職の支援、キャリア形成】について大学にどれだけ期待しますか。】

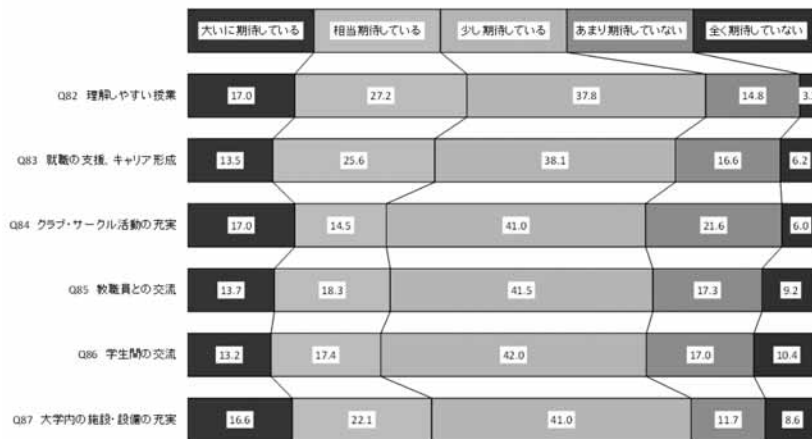
【問 84 あなたは、【クラブ・サークル活動の充実】について大学にどれだけ期待しますか。】

【問 85 あなたは、【教職員との交流】について大学にどれだけ期待しますか。】

【問 86 あなたは、【学生間の交流】について大学にどれだけ期待しますか。】

【問 87 あなたは、【大学内の施設・設備の充実】について大学にどれだけ期待しますか。】

表 2 経営学部で充実させてほしい教育内容



大学に対する質問については、「大いに期待している」「相当期待している」「少し期待している」を合計すると、「理解しやすい授業」（82.0%）、「就職の支援、キャリア形成」（77.2%）、「クラブ・サークル活動の充実」（72.5%）、「教職員との交流」（73.5%）、「学生間の交流」（72.6%）、「大学内の施設・設備の充実」（79.7%）という結果となる。期待の割合の度合いに高低はあるものの、各質問とも7割を超えている。期待度の高いのは8割を超えた「理解しやすい授業」、次いなのは「大学内の施設・設備の充実」、「就職支援、キャリア形成」であった。キャリア形成に向けた取り組みへの期待が大きいことが読み取れる。

4. 分析と課題の抽出

上記の整理から得られた内容を、学生の将来のキャリア形成の視点から考察を進め、今後、学部教育・運営の上で検討が必要となる課題の抽出を試みる。

(1) キャリア意識

経営学部は、実社会で活躍するプロフェッショナルの育成を目指す学部であり、職業に直結するカリキュラムを提供していることから、将来職業に就くことを含め、社会へつながる教育・運営を期待して入学して学生たちが在学していることが想定される。

本調査結果では、男女比および入学年別の構成比を考慮すると、概ね経営学部生の特性を表しているといえる。まず、地元および周辺である関東地方出身者が7割を占めていること、また、普通科出身者が7割を占め、職業により近い学習をしてきた商業科・工業科出身者より多いことが母集団の特性として挙げられる。

1) 入学前

城西大学経営学部生は、総じてキャリア意識が高い傾向がみられた。

城西大学経営学部への志望順位は、第一順位でなかった学生が過半数含まれるが、大学に入学した一番の理由や経営学部を選んだ理由をみると、大卒資格を得ること、知識や教養を高めたい、就職に有利、専門性を高める、希望する職業につくため、高校卒業後に就職したくない、友人・知人を得ること、仕事に有利、経営学やさまざまな科目、資格取得、5つのマネジメントコース^⑥など、学部特性に沿った授業や、将来の人生や職業など学生自身のキャリア形成につながるカテゴリーに約8割の学生が回答している。

学部の特性は学位授与の方針であるディプロマポリシーに表される。城西大学経営学部のディプロマポリシーは、「地域社会や国際社会で活躍する起業家精神を持ったマネジメントのプロフェッショナルの育成を目標」とし、「幅広い教養とマネジメントについての専門的知識、地域社会や国際社会で活躍するための基礎的能力、マネジメントに関わる問題や課題を自ら発見し、解決するための思考力・判断力・実践力、起業家精神を持ち、社会や組織の中でリーダーシップを発揮し、価値を想像する能力、多様な人と協力し、市民としての高い責任感と倫理観を持って主体的に社会に貢献する能力」の知識・能力を修得したと判断された人に学士（経営学）が授与されるものである。「営利組織だけでなく非営利組織も含めた社会におけるすべての組織に適合するマネジメントを、学際的に研究し教育」していくとし、学生のキャリア、すなわち、将来の職業や

人生を踏まえて、学生を社会につなげていく教育・運営をめざしている。このことから、経営学部のカリキュラムは、職業や人生を含めたキャリア形成に直結するカリキュラムを多く含む特性を持つ学部であり、入学前から、約7～8割の回答者が人生や職業を含めたキャリア意識を持って経営学部に入學してきているといえる。

2) 在 学 中

経営学部生は、先にあげたような入学前のキャリア意識を在学中も持ち続けている。経営学部の授業で興味を持っている分野に対する回答は、学部特性に沿ったカリキュラムを踏まえた内容に広く分散しており、「会計（簿記など）」（15.5%）、「健康・スポーツ」（8.9%）、「組織人事、労働」（8.6%）、「観光・ホスピタリティ」（6.3%）、「情報、IT」（4.9%）、「行政・法律」（3.6%）、「環境問題」（2.0%）、「地域振興、まちおこし」（1.3%）である。学部の授業で期待するメリットでは、キャリア形成につながるような質問、すなわち資格取得、働くうえで直接役立つこと、人生の指針や思想の形成、専門知識や学術的な知識の修得、教養が身につく、就職活動で有利になる、友達・知人のネットワークができることなどに対し、約9割の学生がメリットを期待しているといえる。しかし「メリットを期待していない」学生も7.5%存在している。在学中の悩みについては、キャリアに係る進路・就職の問題が41%と最も高い。悩みには、その他にも、学業以外の日常生活、自分のこころ・内面の問題、大学が面白くない、授業についていけない／単位が取れない、課外活動の問題、経済的事情、人間関係、家庭内の問題などその内容は多岐にわたり、また複数の悩みを持っている学生の存在が確認される。将来のキャリアを考える上で無視できないものであり、問題解決に向けたきめ細やかな対応が必要になる。経済的に苦しいと回答した学生は14.4%である。

3) 卒 業 後

卒業後について、約9割が働くことに対する意識をもっている。しかし、そのうち強い意識をもっている学生は6割にとどまっており、できれば働きたくないが働かざるを得ない、と考えている学生が16.7%である。その他、少し働くことに対する意識はあると回答した学生は15.0%いる。働くことの意義や重要性についての理解を促す教育機会を確保することが重要である。

仕事と私生活の順位付けについては、仕事優先とする学生が半数存在しているが、約3割は、優先順位はつけられないとし、私生活を優先するとした学生は約2割である。つきたい職業のイメージを少しでも持っている学生は約6割いるが、具体化できている学生の割合は2割にとどまっている。最も希望する職業については、75.8%が民間企業、公的部門が4.5%であり、合計すると約80%となる。なりたい職業が思いつかない学生は12.1%いる。将来のキャリア形成につな

げていくために、イメージが具体化できるような教育機会を設けることが重要であろう。また、転職への意識を持つ学生が6割いる。離職までの年数については不明だが、例えば3年内離職の問題など、働き手にとってメリットが少ない転職についての指導は特に重要となる。

将来、個別の職業へ就くことへの希望についての質問では、独立して事業を起こしたいと思う学生は約3割存在する。公的部門への職員への希望は、半数近い数値となっているが、問43の「最も希望する職業」として公的部門の職員を希望する学生は少数派であったことは既に確認されている。発達が目覚ましいITに関わる仕事への希望は、約3割が存在する。海外に向けた意識では、経済的事情が許せば留学したい（したかった）とする学生が約半数いるのに対し、卒業後10年以内に海外で働くことについては、強く思うと少し思う、の肯定的な回答をした学生は31.8%であった。職業についての理解をうながすことや、自己分析を通してより自分に合った職業について考えさせる授業を展開するなど、職場におけるミスマッチを防ぐためのキャリア教育や多様な希望に対応できるキャリア支援の強化が重要である。

地元やローカルに係る質問では、地元が好きとしながらも、都会も好きとする学生が約半数いる。大学卒業後20代で最も働きたい場所については、東京、埼玉を含む関東地域で7割を占めるが、残りの3割は、「わからない」や「どこでもよい」あるいは、他府県や海外を希望する学生もいる。地域によって、求人数が限られ、関東地域と比較して少ない地域もあることから、今後とも地域別の就職支援体制の強化が必要となる。

上記のように、キャリア意識の視点では、入学前から学部の特性に沿った学習を含めて、将来の仕事や人生など、学生自身のキャリアにつながる意識をもって入学してくる学生が多いたことがわかった。在学中、学生は経営学部で学習できる分野に興味を持って臨んでおり、経営学部の授業について、資格取得や働くうえで直接役立つことなど、将来のキャリア形成につながるカテゴリーを選択する学生が9割いた。このことから、在学中もキャリア意識をもち続けている学生が多いたことがわかったが、授業へのメリットを期待しない学生や、職業についてのイメージができていない学生も一部いたことがわかった。キャリア形成に向けて、職業に就く意義についての理解を促し、具体的な職業をイメージできるようなキャリア教育や、進路や職業への多様な希望に対応できるような支援体制の強化が必要となる。

(2) 学習意識

キャリア形成に向けた考察にあたって、経営学部の学生が学習についてどのような意識や態度で臨んでいるかをみていく。これは「大学生のキャリア意識調査」⁽⁹⁾の結果から、京都大学の溝上慎一教授が得た「学び成長する学生のキャリア意識は高い」とし、学習とキャリア意識が相関や関連があるという貴重な知見を基礎としている⁽¹⁰⁾。

溝上は、キャリア教育は「大学1年ではやすぎるところか、むしろ遅すぎる」とし「キャリア教育（とくにキャリアデザインや将来の見通し）は、中学生、高校生前半の時期から始め、大学生になっても引き続き、教養・専門科目との有機的な関連のもと体系的になされるべきものだ」⁽¹¹⁾としている。学生の学びと成長を促すためには、早い段階からのキャリア教育が重要であるとし、社会や学生の生育環境の変化に応じて、データから学生の状況を理解し、状況に合った教育実践の構築が必要であることについて言及している。さらに、溝上は「学生の学びと成長を促したいのなら、そのような大学教育を構築したいのなら、キャリア教育を併せて行うべき」⁽¹²⁾とも主張している。一方で「キャリア意識の低い学生は、教員の授業力に関係なく教室に入る前から意欲を喪失していることが多い」ことも理解する必要があるとしている⁽¹³⁾。キャリア教育については、「学校から社会へのトランジション（移行）あるいはライフキャリア（生き方）までならんだキャリア教育がなおいっそう求められる。（中略）将来の見通しを持つだけでなく、その見通しを実現すべく、日常生活の中で何に取り組めばいいかまでを考えさせるキャリア教育にもしていく必要がある。先の資質・能力も併せて考えて、それは正課教育の（アクティブラーニング型）授業を通して身につけていかねばならないものである。自らのキャリアの実現のために、授業内外でどのように学び成長しているかを可視化させたり考えさせたりするのも、キャリア教育の役割の1つだとしていかねばならない。これらのことが有機的に繋がって実を結ぶとき、本書で説く『学び成長する学生のキャリア意識は高い』という姿が実現するのだと考えられる。」⁽¹⁴⁾としている。

城西大学経営学部で実施した実態調査では、経営学部向けに独自に考えられた質問を採用しているため、溝上の調査結果と単純に比較することは出来ない。しかし、溝上の大規模な大学生に対する意識調査から得られた、学習とキャリア意識の両者に相関関係や関連が認められるという知見を活用し、実態調査の結果からキャリア意識と学習意識をみていくと、経営学部生はある程度のキャリア意識をもっているものの、その一方で学習に対する意識は高くない。であるならば、経営学部生が着実に学習成果を習得すれば現状より進んだキャリア意識を持つ可能性を秘めていると言えるだろう。

勉学についての自己意識では、意識の強弱含めて「劣位にある」とした学生が6割を占め、「優位にある」（12.5%）と大きな差がある状態である。また、スポーツ・体力についての意識についても同様に、意識の強弱含めて「劣位にある」とした学生は半数近くにのぼり、「優位にある」（24.8%）と大きな差がある。

学習に向けた生活実態をみていくと、回答者の属性では、住居からの通学時間に30分～60分が32.0%と最も多いが、60分以上かかる学生が過半数いることがわかった。通学時間については、長いからといって学習意識が不足しているとは言えず、通学時間が短くても、授業への出席

率が悪い学生がいることは経験値として得られている。また本調査では、通学時間の長さが直接学習意識の低下につながるデータは得られていないが、学ぶ上で支障があることの中に、3割の学生が通学時間を挙げている⁽¹⁵⁾ことは注目に値する。

自分のPCを持っている学生は約6割である。持っていない学生約4割のうち約3割は家族のPCを使うなどの工夫をしているが、PCを使っていない学生が1割弱存在する。PCについては、代替として学内PCの活用、あるいは携帯電話の活用などが考えられる。

スマートフォンについては、全体の98%がスマートフォンを所持しており、学生に浸透していることがみてとれる。しかし、ガラケーも含め、携帯電話を持っていない学生もわずかながらいるため、授業で使用する場合には注意が必要となる。

インターネットの使用時間（一日平均）（パソコン・携帯による、メール・SNSを含む）は、1時間から4時間まで、10%台と分散している。全く使用しない学生が4.2%いる一方で、7時間以上使用するヘビーユーザーも約1割いる。スマートフォンの使用頻度と学習意識との関係については本調査からは直接読み取ることにはできない。しかし、勉強時間などへの影響について注意を払っていく必要がある。

勉強時間の確保については、一週間の通学日数、週当たり受講している講義数、週の学習時間で読み取ることができるが、特に4年生について、通学日数は週1日、コマ数は週3コマ以下、学習時間も「週2時間以下」が6割に達している。就職活動を控えるあるいは活動中の4年生は、卒業に必要な単位取得を大方は3年次までに終了させており、部やサークル活動など、3年で引退するケースがあることから、学習時間や大学で過ごす時間の確保が他の学年に比べ極端に少なくなる傾向がみてとれる。週の学習時間（問14）について、学習は授業の準備・復習、卒業論文、資格取得など授業以外も含む学習時間について質問しているが、全体で「全くしていない」（20.8%）を含め、学習時間が「週2時間以下」の回答者は4割に達している。1年生から3年生のどの学年も3割～4割存在するのに対し、4年生では、6割に達する結果となっている。上の学年になるにつれ、「週2時間以下」が増加し、勉強への意識や意欲が不足している学生の姿が浮かび上がる。「全くしていない」と回答する学生が各学年にみられているが、全学年授業は履修しているのであり、また4年生は、授業外学習はしていない可能性はあっても、少なくともゼミナールについては授業を履修している。しかし、一方で、特に「全くしていない」、あるいは、「週2時間以下」については、4年生以外の他の学年では、授業を含めない学習と捉えて回答をしている可能性が高い。とは言え、学習時間「週2時間以下」の学生が4割に達していることは今後の課題として挙げられる。

部・サークルに参加していない学生が過半数いる。参加している学生のうち、スポーツ系は3割、文科系は約1割である。大学授業以外の大学における学習時間も少なく、また正課外活動に

参加していない学生が過半数いることから、大学のキャンパスにいる時間数が相当限られている可能性がある。

アルバイトについては、従事している回答者は全体で74.7%と高い割合を示している。アルバイト時間が週18時間以上と長く従事している学生が46.4%と半数近くに及んでいることに着目する。1年生と3年生の最も多い回答は「アルバイトをしていない」で、3割弱いる。2年生と4年生で最も多い回答は「週18～24時間」であり、学年による差が顕著である。週18時間以上と長い時間をアルバイトに費やしている学生を学年別にみると、1年生29.1%、2年生54.1%、3年生38.0%で、4年生は72.0%となっている。また、週24時間以上、さらに、週30時間以上のアルバイトをしている学生も散見される。従事時間が特に長い学生については学業への影響が懸念される。アルバイトの目的については、経済的な事由や職業体験など、さまざまな理由が考えられるが本調査では明確ではない。アルバイトについて、独立行政法人日本学生支援機構は、文部科学省から引き継いだ、全国の大学学部、短期大学本科及び大学院の学生を対象とした「平成28年度学生生活調査」を実施している。平成16年度から隔年の「学生の標準的な学生生活状況を把握し、学生生活支援事業の充実を図るための基礎資料を得ることを目的」としたもので、この調査では、アルバイト従事率の違いによって、学習への影響が指摘されているところである。一方で、城西大学経営学部の実態調査は質問項目も違うことから単純には比較できない。経験値であるがアルバイトの従事が、学習意識やキャリア意識の喪失に直結するものでもなく、職業体験からむしろキャリア意識の向上につながったり、組織運営の学びやコミュニケーション能力を育む学習の場となったりするケースがある。アルバイトと学業との関連については、質問項目を「学生生活調査」と同様にして改めてアンケート調査を実施するなどが必要であり、今後の課題として挙げられる。なお、主なアルバイト先の業種は最も高い「飲食店」(32.9%)と「小売・卸売」(23.5%)の2業種だけで過半数を占めている。

生活実態を知る上で重要な項目である経済的事情については、調査結果からは、学生たちが必ずしも余裕のある生活をしているわけではない状況を読み取ることができる。生活費や家賃にはばらつきがあるが、経済的負担が多くかかっている可能性のある学生が存在する。このことは実際に、学費未納により退学に追い込まれる学生が少なからずいることは経験値として存在する。経済的な側面を支える制度として考えられるのは、学内外の奨学金制度であるが、回答者のうち約4割が奨学金の利用者となっている。多額の貸与型奨学金の利用は、将来の経済的負担となる可能性がある。学生の社会への移行を踏まえれば、学生の生活実態に合った給付型の奨学金制度を充実していくことが課題として挙げられる。

(3) 大学・学部への期待

これまでの結果から、経営学部生が相応にキャリア意識をもっていることは読み取ることができたが、一方で、学習意識においては、学習時間や勉学での優位性の意識からは、ポジティブな回答を寄せた学生は限られる結果であった。こうした状況にある学生たちは、大学や学部にどのような期待や要望をもっているか、さらに考察を進めていく。

1) 授業評価：

経営学部における特徴ある科目について、学生に関心があるかの質問では、地域に関する科目（まちづくり、地域の行政、地域と産業、地域企業研究など）について、約6割の学生に関心を寄せている。また、会計入門、情報技術、基礎ゼミ、ゼミナールはそれぞれ過半数が満足しているという回答結果が得られた。一方で、課題として挙げられるのは、TOEIC イングリッシュ、プロジェクト研究科目、およびキャリアデザインの授業である。どのような授業について学生が求めているのか具体的な内容を知ることは、今後の課題であるが、就職活動を支援する授業（筆記試験対策、面接対策など）については、1年生を含めて全学年の学生の6~7割がその必要性を感じており、3年生は76.3%と最も高い結果がでている。16.4%はどちらともいえないと回答し、必要ないとする学生も約1割いるが、早い時期からのキャリア教育が重要であることは前述のとおりである。

2) 大学評価：

7割の学生が経営学部に入學して良かったと思っているが、一方で良くなかったという回答者が約1割いる。良くなかった理由については不明であり、その内容については今後確認していくことが重要であろう。他の大学・学部や専門学校で学びたいと思う学生は66.3%と全体の2/3にも及んでいる。これについても、今後の学部の方向性を検討してく上で具体的な内容を確認する作業が必要である。

城西大学で学ぶ上で支障があることで課題となるのは、「授業が面白くない」という回答が45.2%もあることである。また3割の学生で通学時間がかかることを挙げ、2割が十分に出席できていないことを挙げている。私生活がうまくいっていないが2割弱、経済的事情は2割程度いる。成績、単位取得が思わしくない回答が13%存在する。キャリア関連に対する評価では、就職活動について14.9%は支障があるとしている。授業がどう面白くないか、就職活動のどういった点に支障があるのかなど、より具体的に実態を把握していく必要がある。

城西大学の教育への満足度に関する回答では、満足している、どちらともいえない、不満があ

る、に分散している。課外活動（クラブ・サークル・行事等）は、問16の回答でみたように、大学の課外活動団体に所属していない回答者が過半数いる。どう満足しないのかについて、その理由を具体的に確認することは今後の課題として挙げられる。

経営学部に対する評価については、入学前と現在と変わらないは25%で、約半数の学生が学部に対する評価が上がったとしているが、評価を下げた回答者も17.4%存在する。経営学部への不満では「授業の水準」を挙げる学生が約4割いた。授業内容への不満は36.2%、次いで、教員の教育・指導が29.3%、また、受講者数についての指摘もある。不満はさらに、教育設備、通学支援（大学バス等）、スポーツ施設、食堂・図書館棟の附属設備、奨学金等の学費支援、学生支援サービス（相談など）へと続く。大学や学部の教育や運営における検討課題として挙げられる。

経営学部に対する期待では、キャリア関連のカテゴリーに多くの期待が寄せられている。「就職に強い学部」が最も高く、「仕事の実務を学べる学部」等、キャリア関連のカテゴリーをまとめると約7割に上ぼる。クロス集計においても1年生から4年生まで、全ての学年において「就職に強い学部」が最も高かった。次に高いのは1年生から3年生まで「仕事の実務を学べる学部」であり、4年生は「資格が取れる学部」である。また、大学への期待については、不満に対する改善を期待する声と受け止まれる内容が含まれている。例えば、「理解しやすい授業」が最も高く8割を占める。「大学内の施設・設備の充実」「就職の支援、キャリア形成」「教職員との交流」「クラブ・サークル活動の充実」のいずれも7割を超えている。

経営学部に力を入れて欲しい活動でも、キャリア関連のカテゴリーは顕著に高く、合計で9割近くに達している。「就職に役立つ教育・指導」が最も高い。そして「理解しやすい授業」、「面倒見のよい教育指導」が続いている。学年別では、1年から3年生は特に「就職に役立つ教育・指導」を求めている。「就職キャリア支援」は、2年生が5.5%と極端に低いことにも着目する。経団連の就職活動ルールが廃止されることとなり、活動開始の早期化長期化が今後一層進む可能性がある。2年生の就職を含めたキャリア意識の向上は今後の課題となる。

経営学部で充実させてほしい教育内容は、マネジメント教育が最も高く過半数を占める。語学、会計、語学以外のグローバル教育、情報教育、スポーツ・保健体育分野の教育、基礎ゼミ・ゼミナール、プロジェクト研究科目、教員養成教育と続いており、カリキュラムの検討の参考となる。

5. 今後の学部教育・運営における課題と方向性

以上、キャリア形成の視点を踏まえて、課題の抽出を試みた。下記にその結果をまとめ、各課題に対する改善案を挙げていく。

(1) キャリア意識

① 学生の興味ある分野が多岐に分散している

経営学部のカリキュラムは、多様な学部生に対応できる多様な分野が用意されており、学部特性を活かした科目を引き続き提供していくことが求められる。興味ある分野が多岐にわたることで、多様な学生の学習意識を喚起し、専門分野における学習を強化し、キャリア形成につなげていくことができる。入学前の高校生に対しては、学部のディプロマポリシーや学部の特性について理解を促すことで、入学後のアンマッチを防ぐよう、広報活動を継続的に行っていくことが重要である。

② 複数の悩みを抱えている

最も悩みの多い、進路・就職については、キャリア教育やキャリア支援を強化によって対応していくことが重要である。学業以外やこころ・内面の問題、家庭の事情、人間関係などについては、ゼミにおける個別面談の実施により学生の状況の把握につとめることや、地区懇談会において保護者への協力の呼びかけ、保健センターの窓口の紹介などを行っていくことが重要である。また、授業についていけない／単位が取れないなどについては、わかりやすい授業、理解を促す授業など、質問や相談を受けやすい環境づくりを心掛けることや、1科目の受講者数を抑えることで、授業へより集中できる環境作りを行っていくことが求められる。授業中のスマートフォンの利用制限などのルール作りなどは今後の課題として挙げておきたい。

③ キャリア意識は持っているが、具体化できていない

働くことの意義や重要性についての理解を促したり、また、将来のキャリア形成につなげていくために、具体的な職業を考えさせる授業の展開など、キャリア教育の機会を確保すること、また、自己分析を通してより自分に合った職業について考えさせる授業を展開することで、就職先でのミスマッチを未然に防ぐための教育やキャリア支援を行うことが重要である。また、キャリア教育について、学習開始のタイミングは、早ければ早いほどよいという知見があり、低学年から取り込んでいくこと、就職課によるガイダンスは、経営学部では2年生と3年生に対して行われているが、1年生からの実施が望まれる。

④ 転職の意識をもつ学生が6割いる

3年内離職の問題について、経済社会への影響や、働き手にとってメリットが少ない転職について考えさせるなどのキャリア教育が重要である。

(2) 学習意識

① 勉学について劣位にあると答えた学生が6割を占める

学習意欲を喚起し、高校までに培ったキャリア意識を最大限に引き出すことで、キャリア意識の向上につなげていくことが期待される。例えば、1年生から主体的な学習態度を引き出す授業をゼミで実施したり、キャリア意識を喚起させるような教育をキャリアデザインの授業を通じて実施したりすることや、キャリアデザインの授業では、多様な職業を理解するための授業を展開すること、また、就職課にガイダンスなどとタイアップした授業を展開することなどが考えられる。

また、どの授業も「理解しやすい授業」「面倒見のよい教育指導」をこころがけ、授業内容の工夫で学習意識を喚起し、キャリア意識の向上につなげていくことが重要である。学習外時間を確保するため「アクティブラーニング型の授業」を取り入れる工夫を行ったり、予習復習を課したりすることも有効であろう。

② 自分のPCを持っている学生は約6割である

大学のPCの利用については、大学内における使用環境の改善の検討は課題として挙げられる。1人に対し1000枚の印刷制限について、勉学意識の高い学生に対しては申請によってより多くの印刷を可能とすることなどが考えられる。

③ 部・サークルに参加していない学生が過半数いる

入学当初より、ゼミなどで正課外活動への参加により得られるメリット（コミュニケーション能力の育成など、就職活動やキャリア形成につながること）などの説明や指導をおこない、参加を積極的によびかけることが期待される。

④ アルバイトに関する課題

長時間にわたるアルバイトに従事している学生に対しては、ゼミ担当教員が学業への影響などについて指導を行うこと。アルバイトを通じた職業体験を活かし、将来の職業について考えさせるような授業展開を行うことは、キャリア形成につながるであろう。

(3) 大学・学部への期待

① 授業評価において、特に満足を得られていない授業

授業内容や方法などについての再検討を行うこと。特にキャリアデザインについては、学生が

求める授業内容が何かを学生に確認し、学生を社会につなげていくためのキャリア形成につながる授業内容を取り入れていくことは重要である。

現在、基礎ゼミⅠからゼミⅡに至るすべての学年のゼミには「キャリア研究含む」というサブタイトルがつけられているが、指導内容については各教員に任されている。しかし、少なくとも「キャリア研究」部分は、各学年で扱う内容は共通として定め、ゼミの指導教員が変わっても4年間を通じてキャリア研究がスムーズに進められる体制作りを行うことは検討課題として挙げられる。

以上によるゼミの充実に加え、キャリアデザインやインターンシップ等のキャリア関連科目での絞ったより効果的な授業が展開可能となる効果も期待できる。

② 就職活動を支援する授業

1年生を含めて6~7割がその必要性を感じていることに対応することも重要である。3年生は76.3%に達している。一部必要ないと回答する学生もいることも踏まえる必要がある。また、筆記試験・面接対策の授業実施の検討をおこなうこと。面接対策においては、ゼミやキャリアデザイン、など一部授業では既に実施しているが、より充実した授業展開をどのように行うかを検討することは課題として挙げられる。

③ 大学・学部への評価と期待

他の大学・学部や専門学校で学びたいなど、進路変更希望を持つ学生が潜在的に2/3存在する。進路変更による学習意欲の喪失や退学者を防ぐためには、入学前に、城西大学経営学部のディプロマポリシーの理解を促すこと。授業内容と自身が勉強したいこととのミスマッチを防ぐためには、引き続き、オープンキャンパスやホームページ、パンフレットなどで理解を促すことが必要となる。

④ 不満・支障について、大学・学部で対応できる内容について検討を行っていくこと

例えば、半数近くいる「授業が面白くない」層に対して、いかに面白い授業を展開するかの検討。出席ができていない、成績、単位取得が思わしくない学生に対しては、ゼミにおける面談を通して、思わしくない要因をつきとめ、担当教員に指導を仰ぐよう助言するなど、指導を行っていくこと。きめ細かな対応のためには、ゼミ定員の抑制による対応が必要となる。

「教育水準」に約4割が不満をもっている。水準の高低どちらの方向に向けた不満であるか明確でないが、『中学・高校の基礎学力を復習する授業』（問63，調56，p68）について、「必要である」と思う回答者が全体の47.4%にのぼっており、必要ないと感じている回答者の約3割を超

えている。また、難しいと感じる授業の割合が、「～20%」までの合計が57.2%にのぼっている(問57, 調51, p63), 授業内容, 教員の教育・指導, その他を含め, 不満とする回答者に対し, さらに具体的理由について内容を確認できるアンケート調査を実施することなど, 今後の課題となる。

⑤ 学部への期待への対応

回答者の多くがキャリアへつながる教育を期待している。「就職に強い学部」や「仕事の実務を学べる学部」「資格が取れる学部」等が続いている。このことから, 引き続き, 学生の将来のキャリアにつながる授業実施を行っていくことは重要である。

大学への期待への対応については, 最も高い8割を占める「理解しやすい授業」への対応, また, いずれも7割を超える「大学内の施設・設備の充実」「就職の支援, キャリア形成」「教職員との交流」「クラブ・サークル活動の充実」の対応の検討は今後の課題である。具体的な内容を問うアンケート調査の実施などが考えられる。

⑥ 経営学部に関心をもちたい活動

「就職に役立つ教育・指導」「理解しやすい授業」「面倒見のよい教育指導」への要望はそれぞれ3割以上の学生が求めている。「就職に役立つ教育・指導」は1年生も高い意識をもっている一方で, 「就職キャリア支援」は, 2年生が5.5%と極端に低い。前述のように, 1～3年生に対する就職に役立つ教育・指導の実施を強化していくことは, 引き続き検討課題となる。また, 「理解しやすい授業」や「面倒見のよい教育指導」については, 特にどの授業に対して求めているかをアンケート調査するなど, 対応が可能となるであろう。

6. おわりに

以上のように, 経営学部で実施されたアンケート調査結果から, 学生を社会へつなぐためのキャリア形成の視点で整理・分析し実態を把握するとともに, 今後の学部の教育・運営についての課題と改善案を提示した。

この調査で明確になったことは, キャリアに対する意識をもつ学生は多くいるが, 強い意識をもった学生は限られていた。キャリア意識と学習は相関や関連があるという知見を基礎とすると, キャリア意識をもっている経営学部生は, 同時に学習能力をもっているとも解釈することができる。一方で, 経営学部生の実態を見ると, 正課外授業, 通学時間, アルバイト, インターネットなど多岐にわたる理由で学習時間を十分に確保していないために, 学習による能力の育成が限ら

れている可能性がある。その結果、キャリアに向けた意識の向上も限られてしまう可能性を読み取ることができた。キャリア意識をもっている学生については、学習時間の確保と共に、学生が期待するようなわかりやすく面白い授業展開ができれば、学習意識が喚起され、学生の能力が大きく育成される可能性があるといえる。学生の悩みや支障を取り除き、学生が求め期待する学部教育や運営ができれば、学生の学習に対する取組姿勢や態度に変化をもたらせる可能性があるということであり、それは学生のキャリア意識の向上へとつながる可能性がある。そしてやがてはキャリア形成を通じた自己実現につながるものとなっていくことが期待される。

学生が期待する授業とは具体的にどういう授業か、面白い授業とはどういう授業を指すか、わかりやすい、理解しやすい授業とはどういう授業をさすのか、今回の調査では具体的な回答を得ていない。より学生に寄り添う授業展開に向けて、より具体的な調査を行っていくことは今後の課題として挙げられる。また全国調査と同様の質問によるアンケート調査の実施も、学部の実態の把握と知見の活用につながるものであり今後の課題となる。さらに、果たすべきミッションの一つが、学生を社会につないでいくことであることは、既に説明した通りである。上記の課題に加え、最後に、今後のさらなる課題として挙げておきたいのは、社会へ移行したあと、卒業生がどのような人生を送っているか、キャリア形成を図り自己実現に向けてキャリアを積み重ねているかどうかを確認し、実態を把握していくことである。卒業後の実態の把握によって経営学部での学びの効果をより現実的に検証できる可能性があり、今後の研究課題として挙げておきたい。

《注》

- (1) 中央教育審議会 (2018)。
- (2) 厚生労働省 (2018)。
- (3) 本稿では、職業生活だけでなく家庭生活を含めた人生の積み重ねのことを「キャリア」と表現している。
- (4) 城西大学経営学部 (2018)。
- (5) 朝日新聞 (2018)。
- (6) 「今回のアンケートは、城西大学『人を対象とする研究倫理審査委員会』の承認を得て (人倫-2017-02) 委員会のしるしに従ったアンケートを実施した」(城西大学経営学部 (2018), p. 3。)
- (7) 城西大学経営学部 (2018), p. 5。
- (8) マネジメント総合学科の5つのマネジメントコースは、「企業・会計」、「環境・情報」、「行政・教育」、「健康スポーツ」、「観光・地域」の各マネジメントコースで構成される。
- (9) 溝上 (2018), p. 16。
- (10) 「その後の他の調査研究でも、学習とキャリア意識との相関や関連はさまざまな形で認められている (河井・溝上, 2014; 溝上・畑野, 2013; 梅崎・田澤, 2013)」としている (溝上 2018, p. 4)。
- (11) 溝上 (2018), p. 6。
- (12) 溝上 (2018), p. 7。
- (13) 溝上 (2018), p. 7。

- (14) 溝上 (2018), p.7。
(15) 城西大学経営学部 (2018), 問 74, 問 75。

参考文献

- 朝日新聞「中退率や満足度も。大公開時代 大学選び, 偏差値以外も重視。」2018年5月1日朝刊。
厚生労働省「新規学卒就職者の離職状況(平成27年3月卒業者の状況)」2018年10月。
厚生労働省「平成29年賃金構造基本統計調査」2018年2月。国立教育政策研究所「大学生の学習実態に関する調査研究について(概要)」2016年3月。
国立教育政策研究所「大学生の学習実態とその構造的特質」2016年10月。
財務省「我が国財政をめぐる現状等について」2018年9月。
城西大学経営学部「キャリア・グローバル指向の学部教育に向けた実態調査 経営学部生の学業・生活に関するアンケート調査報告書」2018年3月。
中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(答申)」2008年12月。
中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて——生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ——(答申)」2012年8月。
中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 大学入学者選抜の一体的改革について——すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために——(答申)」2014年12月。
中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」2018年11月。
東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター「2007年全国大学生調査」2008年5月。
独立行政法人日本学生支援機構「平成28年度学生生活調査結果」2018年3月。
日本経済新聞「高等教育無償化を読み解く①」2018年9月12日朝刊。
溝上慎一『大学生白書2018——いまの大学教育では学生を変えられない』東信堂, 2018年8月。

Current Conditions and Directions of Education at the Faculty of Management vis-a-vis Student Career Development

—Based mainly on “The Survey on Current Conditions regarding Career-
and Global-Oriented Education at the Faculty of Management” —

Junko SAKAGAMI, Shikato KAMIMURA, Masato ONO

Abstract

This paper compiles proposals on how the Josai University Faculty of Management educates and supports undergraduates in their future career development and in their transition from university to society and workplace, taking their current circumstances and viewpoints into account.

The proposals provided are based mainly on survey results obtained in the article given in the subtitle. The research group at the Faculty of Management conducted the survey in 2017. According to survey results, many students had relatively high understanding of their future career goals and were interested in learning related to their career development. However, some students indicated that their learning abilities were inferior to other students in their age group. Some students indicated not having sufficient time to study due to long hours at part-time jobs and/or time spent on the Internet, etc. Some indicated having worries and concerns regarding career path, job-hunting, learning and financial problems.

The study results also provide ideas for improvements in faculty operations aimed at motivating such students to learn and to lead them to further career development.

Keywords: career design, student life, student awareness, job hunting, faculty operation, IR